

2019第3回小野寺眞悟杯北海道特別支援学校フットサル大会 北海道高等聾学校と台湾台北市立啓聴学校選手団との交流について

北海道高等聾学校サッカー部顧問橋谷利崇先生は、日本手話と台湾手話をコミュニケーション手段として行われた生徒同士の交流に係る感想を次として整理してくださいました。

N. A

人生初の聾者の外国人との交流を行い、当然手話も違ってくるのでコミュニケーションになかなか困難がありましたが、分かりやすい手話や台湾の手話を使うと、とても楽しく話をする事ができ、大変良い経験となりました。また、夏休み中にLINEを通じて、テレビ電話をして、日本と台湾の違いやプライベートなどの話をしました。

O. N

最初は、日本の手話と台湾の手話が全く違って、会話のズレがあったけど、翻訳アプリを使って、お互い見せ合いながら会話をしました。少しずつ分かってきて、日本の好きな料理などいろいろ質問しました。台湾の手話を学べて本当に良かったです。良い経験になってとても楽しかったです。

T. A

アジア系の聾の人と初めて交流をして楽しかったです。最初のあたりは手話が分からなくて通じなかったのですが、少しずつ会話に慣れてきて、自分も相手も楽しくなると実感しました。

こういう機会は滅多にないものですから、貴重な時間をくださったことに感謝したい気持ちでした。

またこのような機会があればうれしいと思います。

I. Z

台湾チームとコミュニケーションを取るとき、最初はできなかったけど、少しずつコミュニケーションを取っていたら、全部は分からないけど、分かるようになっていって楽しかったです。

N. K

台湾人と交流することが初めてなので、緊張しました。スマホの翻訳ソフトを使ったり、身振りを使ったりしてコミュニケーションを取ることができ、楽しかったです。また外国人と交流したいです。

T. A

手話がところどころ通じるのもあったことに驚きました。趣味の合う方がおり、親近感がわきました。台湾での手話を知ることができ、良い経験になったと思いました。

